

『住吉物語』諸本論

——姫君の家出の場面を中心に——

豊 島 秀 範

一、緒 論

『住吉物語』の諸本を細かく比較してゆくと、本文異同の上で充分に考慮されなければならぬ幾つかの場面がある。例えば、磯部貞子氏が主として徳川家本の優れた特質を主張しようとして比較検討された、〈嵯峨野の場面〉〈姫君が住吉の尼と手紙を交わす場面〉〈姫君の家出の場面〉〈少将が住吉に行く場面〉〈物語最後の場面〉などがそれである(注1)。また、桑原博史氏は極めて詳細な本文の比較を、物語のほぼ全般に亘って既に試みられている(注2)。その結果として、磯部貞子氏は「徳川家本」が「古本住吉物語」の文章を最もよく伝えているものと主張し、桑原博史氏は従来の説に沿いながら、「徳川家本」は省略された文章であって、「成田本」「藤井本」などが「古本住吉物語」の原型を思わせるものであるという、全く対照的な見解が示されているのである。

『住吉物語』研究の重要な目的の一つが、諸本の系譜をたどり、原本の姿を究明することにあるのは周知の通りだが、その道程は暗くて遠い。しかし、決定的な外的資料が乏しい現状下では、作品の表現を細かく検討しながら、諸本を丁寧に比較していくしか方途はないであろう。

以上のような視点に立ち、「原住吉物語」の姿を遠くに見つめながら、右に指摘した場面の一つである、姫君が尼君をたよって住吉へと逃れて行く場面について検討を加え、少しでも『住吉物語』の諸本関係を究明したい。

二、姫君の家出場面の一覧

姫君が尼君を頼って住吉へと逃れる場面は、「尼君の上京」から始まり、「姫君、住吉へ到着」まで、ほぼ一八の場面に細分することができる。勿論、これ以前に、姫君と住吉の尼君との間に手紙の往復がなされる重要な場面がある。苦境を訴える姫君の手紙(手紙文は侍従が書いている。「徳川家本」では、この場面は削除されている)と、それに応える尼君の姿勢があつて初めて、ここでの印象的場面が展開可能となるのであり、さらには尼君の登場の仕方にも多少の問題が含まれていることから見逃すことはできないところだが、ここでは、尼君の上京以降に絞って論じていくことにする。

「尼君上京」以後の場面は、(表1)にその一覧を示した通りである。各々の伝本に付してある括弧内の数字は、桑原博史氏が和歌の多寡を以って第一類から第六類までに分類されたその所属を、参考までに記したものである。

(表1)を一覧して判るように、成田本・藤井本・住吉本・古活字十行本・羽根満主賀本・書陵部本・契沖本の七本は、物語場面の進展を見る限り、全く同じ順序を保っているということである。このことから予想されることは、少なくともこれら七本は祖本を同じくしているということ、あるいは相互に影響関係があり得たということは当然考えられよう。さらには、『住吉物語』の原型を模索する上にも、重要な方向性を示してくれているとも思われる。「契沖本」のみは、他

(表1)

(表1)																			
(1)	尼君、上京	1	成田本(1) 藤井本(1) 住吉本(2) 古活字十行本(4) 羽根満主賀本(4) 書陵部本(5) 契沖本(4)																
(1')	心寄せの式部																		
(2)	中納言、姫君を訪う	2																	
(3)	尼君からの迎えの車	3																	
(4)	10月20日余り、姫君、家を出る	4																	
(5)	尼君、姫君と対面	5																	
(6)	夜、淀に着く	6																	
(7)	夜、少将、姫君を訪う	7																	
(8)	中君・三君の所にも姫君おらず	8																	
(9)	中納言の悲嘆	9																	
(10)	中君・三君の嘆き	10																	
(11)	継母の偽悲	11																	
(12)	少将の悲嘆	12																	
(13)	三君、姫君の歌を発見	13																	
(14)	中納言の悲嘆	14																	
(15)	継母の雑言	15																	
(15')	中納言、継母の策略を思う	15'																	
(16)	明け方、川尻を過ぎる。叙景文	16																	
(17)	尼君の歌	17																	
(18)	住吉に到着	18																	
		⑥	東京教育大本(3)																
		⑦	神宮文庫本(4) 陽明文庫本(5)																
		⑥	白峰寺本(5)																
		⑦	野坂本(6) 真銅本(6)																
		13	徳川家本(1)																
		11	京都本(1) 国会本(1)																
		14	横山本(4)																
		△																	

(註) ○算用数字は、場面の順序を示している。○印で囲んだ数字は場面の順序が変化していることを示す。

○最下段の○印は、いずれの諸本にも在る場面を示し、△印は、場面はあるが、順序が異なっていることを示している。

の六本に比して、表現に多少の相違があるが、それほど大きな差はない。この事実は、「東京教育大本」以下、「神宮文庫本」「陽明文庫本」「白峰寺本」「野坂本」「真銅本」「横山本」などの諸伝本が、それぞれに場面の順序に相違をみせている中であって、場面の数の上では相当な違いはあるものの、その順序は「成田本」以下の諸本と同じ姿を保っている「徳川家本」「京都本」「国会本」の本文を考えていく上に、何らかの示唆を与えることにもなる。

以下、(1)「尼上の上京」に始まる各々の場面に沿いながら、論を進めていこう(注3)。

三、尼君の素姓について

尼君の素姓については、「藤井本」に、

故母宮の乳母なる女の、宮にをくれまいらせて後に、尼に成て住吉になん侍りけるを思ひ出でて、(九八頁)

とある表記が他の諸本においても圧倒的に多い。「故母宮の乳母なりける女房」(契沖本)・「野坂本」・「真銅本」など、「故母宮の御乳母」(「住吉本」・「神宮文庫本」・「陽明文庫本」・「東京教育大本」・「横山本」・「京都本」・「国会本」など)といったの表記もあるが、それほど問題とはなるまい。「書陵部本」(「御所本」は本文欠失で不明。「徳川家本」はこの尼君との手紙往復の一場面の本文が、意図的に削除されているようで、やはり不明である。問題となる表現は、

○故宮の乳母子なりける女房(「成田本」三〇頁)

○姫君の母宮の御乳母。宮に離れまいらせたりし時、(「住吉本」二三〇頁)

○故宮の御乳母さあもんのすけといひし人尼になりて、(「国会本」二二九頁。

「京都本」三二三頁)

○故母宮におくれまいらせて、尼になりて、住吉に侍従がをばのありけるを思

ひ出て、(「白峰寺本」三三三頁)

などである。「乳母子」と明記されている本文は「成田本」のみである。故母宮の乳母では、尼君の年齢があまりにも高過ぎるとの配慮が、あるいはあったのか

も知れないが、本文の比較で見る限り、「住吉本」の「御乳母。宮に離れ」の「こ」を、「乳母子」と読むか「故宮」と取るかの揺れが原因となっているように思う。「東京教育大本」に、

御母宮の御乳母なりし人、故宮にをくれ奉りて後、(二三〇頁)

とあるように、「故宮におくれ」の記述はあって当然なのだが、この表記を持つのは「教育大本」のみで、多くの諸本は「宮におくれ」と記されている。「住吉本」で「御乳母。宮に離れ」とあるのも充分な表現とは言えない。ともかくも「御乳母子」か「故宮」か早急には断定し難い本文を「住吉本」は有しており、そのことが「成田本」での「乳母子」の表現を招来させたとも考えられる。「成田本」は「藤井本」と共に、有も「原住吉物語」に近い本文を持つものと目されているわけであるが、その本文にしても、様々な問題を含んでいるというこの一端であろう。

「国会本」「京都本」にある「御乳母さあもんのすけ」であるが、この女房名は、物語の初めで姫君の母宮が亡くなった場面において、即記されていたのであるが、他の諸本には認められない特異な表現である。

「さあもんのすけ」は住吉の尼君としてここで登場するわけであるが、この女房名を有する「国会本」「京都本」及び「天理本」「大阪本」の四本について、桑原博史氏が「構成上の緊密さをねらったもの」とし、また、四本に共通する類似表現や、表現・語法の特徴などから、「或る一人物の手によって、話の筋は原型のままであっても、文章そのものはかなり改められた、ということを示すものとおもわれる」(注4)との指摘があるように、意図的な改作が「国会本」「京都本」になされていることは自明である。

その意図的改作をさらに進めたものが「白峰寺本」である。住吉の尼君を「侍従がをば」とすることは、他の諸本と比較しても、その発想の経緯は全く不明である。侍従は姫君の乳母の子供で、姫君より二歳ほど年長であること、母である乳母も物語の開始後間もなく死んでいることなどは、諸本ともほぼ共通していることである。住吉の尼君を思い出し、手紙を書いたのは侍従であるから、侍従と

尼君との間柄をより親しい「をば」とする考えも、零開気としては理解できるのだが、そうであるからといって「白峰寺本」の改作姿勢の特異さは変わらない。

この「白峰寺本」の本文は今後も度々指摘するように、最も振幅の大きな改作内容を含んでいるのである。それは「真銅本」「野坂本」にみられる和歌や年中行事などを多く挿入したり、年立上の期日を改変することで抒情的部分を増大させていったのとは多少異なる改作のようである(注5)。住吉の尼君の素姓に関する記述を見る限り、諸本の本文の量の増減や和歌の数の多寡とは必ずしも関連しないところでの改作姿勢が認められるということである。

四、尼君上京の場面

(1)「尼君上京」の場面は、それ以後の、(2)「中納言、姫君を訪う」、(3)「尼君からの迎えの車」、(4)「三君、姫君の歌を発見」、(4)「中納言の悲嘆」、(5)「継母の雑言」、(6)「住吉に到着」の六場面と共に、いずれの諸本にも必ず記されている重要な部分である。にもかかわらず、現存する諸本間には相当の混乱が生じているのも事実である。

まず、「成田本」の本文に即して、要素ごとに引用してみよう。

- (A)さる程に、
(B)住吉の尼君のぼりて、
(C)「かく」と告げければ、
(D)「暮れ方に車をまいらせ給へ」と言ひかへして、
(E)その程見苦しき物ども、とりしたためけん心、
(F)さこそ悲しかりけめ。(三四―三五頁)

上京した尼君は直接に姫君の所に来ることはせず、使者を遣わして上京を伝えた。姫君側の意図を配慮して、人に知られずに行動しようとしてのことである。姫君たちは、暮れ方に車を差し向けるように伝えて、使者を帰したのである。右の本文に不自然なところは何もない。「契沖本」はほぼ同様の本文を有し、他の多くの諸本も、余体的にはかなり類似した表現となっている。

ところが、(D)の表現には相違が認められるのである。「藤井本」によると、(D)暮るる程に、忍びたる車たてまつりければ、言ひかへして、(二〇一頁)

とあって、姫君の所に尼君からの車が夕方に一度来ていることになっている。だが、その車を帰したというのである。同様の本文は「古活字十行本」「羽根満主賀本」にもある。これはどうしたことであろう。そのあとに、

(E)そのほかに、見苦しき物どもとりしたためてけり。(同)

と続くが、これでは「そのほかに」の表現が利かないことになる。「成田本」「契沖本」では、尼君からの車を待つ間という意味であったからである。

このような混乱が生じたのは、「成田本」での「言ひかへして」の対象を、作者と読まずに、迎えの車と解釈したからである。「藤井本」を初めとする三本は、この点で不十分な本文ということになる。つまり、「成田本」「契沖本」とは微妙に異なる祖本に基づいたものか、あるいは改作者の手が入っていると考えられる。

一方、「書陵部本」は、(D)の部分だけがすっぱりと脱落している。本文は(C)から(E)に接続しているのである。それを偶然の結果とは考えにくい。また「成田本」と同様の本文を有する祖本を見ているが、(D)の部分のみを安易に省略するというのも不自然である。おそらく、「藤井本」と同様の本文に依りながらも、その本文では(D)の表現に不自然さを感じたために、その部分を意図的に消去して書写していったのではないだろうか。そう考えていくと、それら三グループの伝本に、自ずと成立の順位が付いてくるのである。

ところで、「藤井本」の表現では、車は来たものの尼君の挙動が描かれていなかった。それをもう一步踏み込んで表現したのが「国会本」「京都本」などの本文である。「国会本」から引用しよう。

暮方に住居の尼君のぼり給ひて見参あり。恐ろしき事ども語り合せて、
「車をまいらせ給へ。よく忍びて」と言ひつつ、色々の物どもとりしたためて、尼君に先にやり、座敷などうつくしく掃きさはやけさせけん心のうち、
さこそ悲しかりなん。(二三五頁)

「京都本」も全く同様である。右の表現では、尼君と会い、姫君の苦境を様々に

語り合った後に、尼君が先に帰っていることが明白である。この件に關しては、「白峰寺本」「東京教育大本」も等しい。ただ、右の文章では、「車をまいらせ給へ。よく忍びて」と言ったのは誰であるかが、必ずしも明確でない。文脈からすれば姫君たちが主語のようである。勿論、尼君から車が差し向けられなければ、姫君たちにはその用意がないとも思われるので、それは当然だとも言えようが、次のような本文もあるからである。

○さて、「暮るる程に車をまいらすべし」とて、尼君降り侍りぬ。(「東京教育大本」二三五頁)

○「忍びやかに、御車まいらせさせ給へ」とて、降り給ぬ。(「白峰寺本」三八頁)

「東京教育大本」は、尼君が車をひっそりと差し向けるの意であるが、「白峰寺本」では、姫君が車を後にする場面のことになり、当然姫君がその主語ということになる。「白峰寺本」には極めて特異な改作姿勢が認められるのだが、わずかな数行の本文に、ここまで揺れが生じているのである。そして、その遠因は、「成田本」などに見た(D)の部分の、いわば不完全な表現に起因していると考えてよいであろう。尼君と対面して語り合うここでの場面が「原住吉物語」にもしもあったとした場合、その対話を完全に消去して、「成田本」などの本文が生まれてくるという経緯は、やはり考えにくいであろう。

「成田本」に代表される本文と、「国会本」に代表される本文との、その両極の間にあると思われるのが、以上に述べた以外の諸本である。例えば「住吉本」では、

此暮程に忍びたる車をまいらせ給へ、(二三五頁)

とあって、姫君側が尼君の使者に伝える言葉であるという点では「成田本」などと同じであるが、「忍びたる車」という表現は「成田本」などの(D)の表現とは異なっており、むしろ「国会本」「白峰寺本」などと同趣の表現なのである。この点は「野坂本」「真銅本」「横山本」なども同じである。

また、「神宮文庫本」には、

住吉の尼「のぼりて候ふ」と中せば、「いつかは」と思ひ給ふければ、嬉しくて、「身づからこそ」など、仰せつかはす。(一一五頁)

と「成田本」などとはかなり内容の違った表現になっている。「陽明文庫本」も全く同様だが、「身づからこそ」の記述が、「国会本」などに認められる尼君との直接の対面を、呼び起こしていく誘因になっているのかも知れない。

「徳川家本」の本文は「成田本」などかなり近いのだが、「急ぎ御車を奉るべきよしをそのかし侍り」と、他の諸本に見られない表現が混り、異和感を覚える。その部分は、書写する際に解釈が加わった表現と思われる。

以上に見てきたように、「尼君上京」の場面に関する限りは、「成田本」「梨沖本」などの本文に、「原住吉物語」の表現が最もよく残されていると思われること、それがやがては「国会本」などの本文へと推移していったことを、想定してみることができるであろう。

五、中納言が姫君を訪う場面(一)

中納言が姫君を訪う直前に、「神宮文庫本」「陽明文庫本」「白峰寺本」には、心寄せの式部と称する女房が登場し、継母の策略が間近に迫ったことを姫君たちに告げる場面がある。「成田本」を初めとする諸伝本では、尼君上京の直前に描かれている場合が多いのだが、この三本は尼君上京後に式部を登場させることで、緊迫感をより効果的に演出したものと思われる。後半での(15')「中納言、継母の策略を思う」の場面も、この三本のみに描かれている内容である。「尼君上京」の所でもふれたように、これらの三本は内容的に相当意図的な改作がなされているのは確かである。

さて、中納言が姫君を訪れる場面であるが、ここでも「成田本」の本文が諸本の基準となる存在のようである。まずその本文を引用しよう。

(G)その時も、中納言わたり給たれば、

鉦又、さらぬ様にておはすれども、「この度はかりこそ見奉らんずれ」と思ふに、忍び難かりければ、顔にふりかけた額の髪より涙のりもり出づるを、

(I) 見給ひて、「いかに、母宮のことを思すにや、乳母の恋しく思ひ出で給へるか。又、兵衛督のことを心づきなく思すにや。ともかくも思さむまにこそ、何事も我れには聞え給べきにこそ。親の思ふ程は、子は思はざりける事の心憂さよ。いかばかりかは、あはれと思ひ聞ゆる。身にかへてこそ思へ」と、の給へば、

(J) 姫君、「母宮のことも乳母のことも思はず。三条え渡りなば、殿を見奉らで程経んこともやと、悲しくなん」と、言葉の下に泣く泣く聞え給はどに、

(K) 中納言、うち泣き給て、「三条へおはすとも、我生きたらん程は、離れ聞ゆべきにあらず。なかなかそのことな思しそ」とて、立ち給を、

(L) 「見聞えんことも今ばかりぞ」と思ひて、泣く泣く顔ふり上げて見やり給へば、目もくれ、悲しさ限りなし。

御侍従も、かたはらに、よそめもしらず泣きゐたり。(三五頁)

父中納言が姫君の部屋を訪れて、住吉行きを目前にして悲しみに沈んでいる姫君と、何も知らずに、娘の身を案じ、言葉を尽くす中納言の姿を記した右の場面は、いずれの諸本にも描かれている印象的なところである。同時に、『住吉物語』にあっては数少ない中納言と姫君との会話が記されている場面でもある。表現も特徴的である。

右の場面で、中納言・姫君・侍従のそれぞれの行為を記した(K)～(M)の要素が、諸伝本ではどのように取り上げられているかを一覧したのが(表2)である。

(○)印はほぼ同様の表現があるもの、△印は類似表現があるもの、×印は相当する内容が記されていないことを意味する。

(表2)を一瞥して判るように、この場面は、「成田本」から「住吉本」まではほぼ同様の表現を有するが、「書陵部本」以下は、(J)の姫君の会話文と、(M)の侍従の様子を記す文を中心にして、極端な差が見られることである。特に「神宮文庫本」と「真銅本」との系統には、その程度が著しい。また、変化の激しい中でも、(G)(H)(I)の三要素は、いずれの伝本にも含まれているのである。ここで必要となるのは、その違いがどのようにして生じているのかを表現に即して考えてみ

(表2)

M	L	K	J	I	H	G	
○	○	○	○	○	○	○	成田本 藤井本 古活字十行本 羽根満主賀本 契沖本
○	○	○	○	△	○	○	住吉本
○	○	○	×	○	○	○	書陵部本 東京教育大本
○	○	△	×	○	○	○	横山本
×	○	○	△	○	○	○	白峰寺本
×	○	○	△	○	○	○	徳川家本
×	×	○	△	△	○	○	国会本 京都本
×	○	別文	別文	○	○	○	神宮文庫本 陽明文庫本
×	×	×	×	△	○	○	真銅本 野坂本

ることであろう。そこで、それぞれの主要要素について、もう少し細かく検討してみることにする。

まず、姫君の悲しみに耐える姿を描いた(H)の部分について、諸本間の比較を試みたい。

(イ) 顔にふりかけたる額の髪より涙のりもり出づるを、(成田本)

(ロ) 顔にふりかけたる額の髪より涙のりもり出づるを、(藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本)

(ハ) 御髪をふりかけ給へり。額の髪より涙のりもり出づるを、(契沖本)

(ニ) 額の髪より涙こぼれ出づるを、(教育大本)

(ホ) 御額の髪よりもれ出づる御涙を、(真銅本・野坂本)

(ヘ) 涙は額の髪を伝ひければ、(住吉本)

(ト) 涙のりもり出づるを、(国会本・京都本)

(チ) 涙もかきくるる心地してもれ出づれば、(徳川家本)

(ツ) 涙もおさへ難くぞおはしける。(白峰寺本)

(イ)御涙せきあへず、(書陵部本)

(ロ)せきやらぬ涙を、(陽明文庫本・神宮文庫本)

右の(イ)～(ロ)を一覧して判るように、「額の髪より涙のもり出づる」の表現が基本となっていることである。それを守っているのが、(イ)～(ロ)まで、(ハ)の「住吉本」は表現が変化し、(ハ)の「国会本」「京都本」は一部分のみの表現である。(イ)の「徳川家本」は、(ハ)の表現に「かきくるる心地して」の部分が割り込んだ形となっていて、その表現自体も、充分に完成した形とはなっていないと思う。そこで判断できることは、「徳川家本」→「国会本」の経緯は考えられず、その逆のプロセスを推測可能にしていることである。つまり、「涙のもり出づる」が、成語として存在していたことは、ここでの最低の要素として認められてよいということである。

また、「額の髪より」の表現は、かなり特徴的だが、本文の質が相当異なる(イ)～(ロ)の諸本にも認められ、これも後から付加されたものとは考えにくいであろう。同様に特徴的な「顔にふりかけたる」は、それを持つ伝本が多くないため安易な判断は避けるべきだろうが、「契沖本」での文を区切った表現からして、少なくとも(イ)「契沖本」→(イ)「成田本」(ロ)「藤井本」への推移は考えにくいだろうから、この表現に限っては、(イ)「成田本」(ロ)「藤井本」がその原典ということになる。ただし、(ロ)「藤井本」の「髪の際より」は、他の伝本にはなく、(ハ)「契沖本」にも影を落としていないので、「藤井本」を「成田本」と同列には扱えない。

以上のように考えてくると、「成田本」から「藤井本」と「契沖本」が生まれ、(ロ)～(ハ)の「教育大本」「真銅本」「住吉本」などは、「契沖本」の表現を受けて生じたのではないか、との推測がなされよう。(イ)～(ロ)の諸本はそれぞれ類似しており、いずれも改作を経た時の表現であると思われる。あくまでも、(ロ)の要素の表現に限ったことではあるが、とりあえず、伝本間の関連を以上のように考えておく。

次に、中納言が姫君に語る(イ)の場面についてであるが、母宮・乳母、姫君の婚

約者である兵衛督(宰相)の各人物と、「親の思ふほどは、子は思はざりける」との表現とに注目してみよう。

まず、人物については、諸本は次のようになっている。

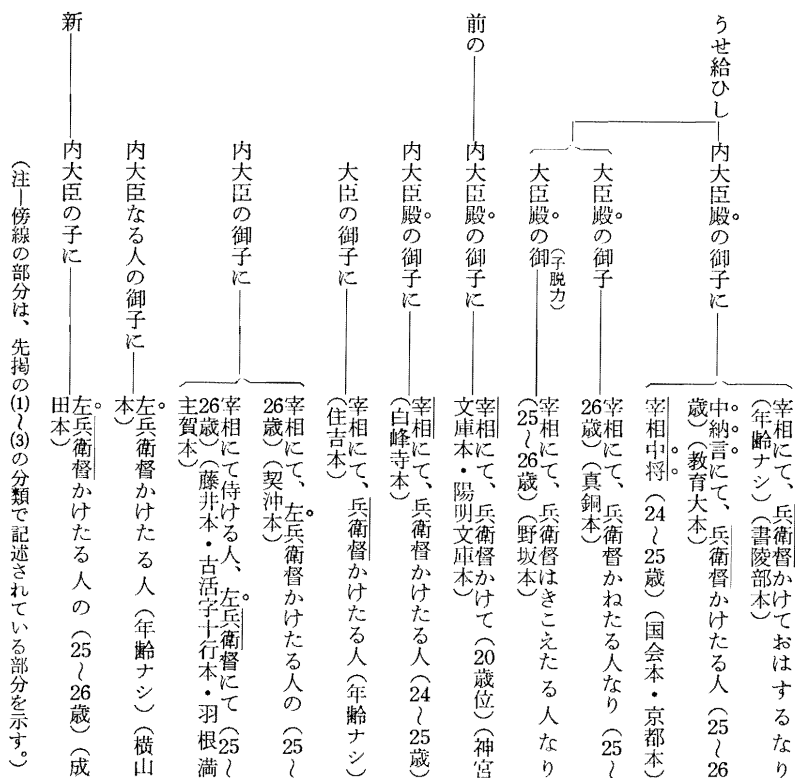
(1)	母宮・乳母・兵衛督	(成田本・東京教育大本)
	母宮・乳母・兵衛	(藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本)
(2)	母宮・兵衛督	(書陵部本・住吉本)
	故母宮・宰相	(白峰寺本)
(3)	母宮・乳母・宰相	(神宮文庫本・陽明文庫本)
	故母宮・宰相中将	(京都本・国会本)
(4)	母宮・乳母	(契沖本)
	母宮	(横山本)
(5)	母宮	(徳川家本)
	母君	(徳川家本)

(4)「右の記述なく、侍従の歌あり」→(真銅本・野坂本)
 (4)の「真銅本・野坂本」は特別だが、(1)～(3)を通して「母宮」は一貫しており、それは基本要素である。ただし、「故母宮」「故宮」には、他と比較して作為が見える。特に「国会本・京都本」は、後述するように、他には例のない呼称「宰相中将」と相俟って、新たな表現を以って改作する意図が充分である。また、「神宮文庫・陽明文庫本」については改作の内容をすでに述べてきたところでもあるが、(2)に分類される諸本は改作を経たものであると考えられる。

やや類似する傾向は「徳川家本」のみにある「母君」にも言えよう。「母宮」と「母君」との差などは、意味上は何ら問題とならないが、表現上の比較においては孤立した存在である。他の諸本に同様の表現があれば相互の影響を問う可能性も生じてこようが、この場合に関しては、他の余ての諸本と別の祖本を想定することができなければ、「徳川家本」の情況は自ずと制限されてくる。

ところで兵衛督・宰相に関する記述であるが、継母とむくつけ女との策略により姫君の「内裏参り」が取り止めになった直後に、中納言が新たに姫君の相手を決めた時に、一通りの系譜紹介がなされて登場した人物であった。

その折の記述は次のようなものであった。



表現が極端に相違する「教育大本」「国会本・京都本」は、諸本の祖本的存在にはなり得ないであろう。およその共通点としては、内大臣の御子で、宰相にて兵衛督をかけている人物で、年齢が二五、六歳、ということになる。ただし、注目すべきことは、「内大臣殿」とある伝本と、「左兵衛督」の表現を持つ伝本とが、ほぼ両方に分かれているということである。さらに、「内大臣殿」とある諸

本の中には、年齢を二〇歳位とする「神宮文庫本・陽明文庫本」や、二四、五歳とわずかなではあるが変化をみせる「白峰寺本」などを初め、「真銅本・野坂本」「国会本・京都本」「教育大本」など、改作が相当に進んでいると見做し得る伝本が多いのである。だからといって、これらの諸伝本の本文が全て「原住吉物語」とは遠いものだという短絡的思考をするつもりはないが、信憑性はかなり低いといえよう。そうであるならば、「兵衛督」に関しても「左兵衛督」が、より祖本に近いと考えてよいのかも知れない。つまり、「契沖本」と「藤井本」以下の三本の伝本あたりが、祖本に近い本文を目指す上で重要な位置を占めているということである。「横山本」と「成田本」については、いずれも「左兵衛督」かけたる人」とあることから、改作を試みたのではなく、「宰相にて」の表現が脱落したものと思う。あるいは、親本に脱落があったのかも知れない。「成田本」と「横山本」の関係を暗示する部分ではある。この二本も「契沖本」などのグループに入れてよいであろう。

ただし、「新内大臣」の記述は、「成田本」の本文に疑いを持たせなくもない。「うせ給ひし」「前の」といった表現との対応も考えられるからである。不審である。

ところで、この場面で注目すべきもう一点は、次の記述である。

- (A) 親の思ふほどは、子は思はざりけること (成田本)
- (B) 親の思ふほどは、子は思はぬならひこそ (契沖本・国会本・京都本)
- (C) 親の思ふばかり、思たまはぬこと (東京教育大本)
- 親の思ひほどには、思さぬぞかし (徳川家本)
- 右の表記が全くない伝本——住吉本・神宮文庫本・陽明文庫本・白峰寺本・横山本・真銅本・野坂本——

(表2) で一覽したように、中納言が姫君に向って語るこの(I)の場面は、諸本間で変化に富み、「真銅本・野坂本」はこれ以後は侍従の悲嘆の和歌を載せている。「神宮文庫本・陽明文庫本」も微妙ながらも別な内容へと話を進めていき、最後には、継母の策略を中納言に告げようとする侍従の行為まで記すことになる。中納言と姫君とが、それぞれの心情に即して会話をこれらの場面は、削除・加筆に都合がよく、改作者の意図により存分に變化させることが可能だったわけである。

その中であって、「親の思ふほどは……」の表現は、後の(4)「中納言の悲嘆」の場面の所と、合わせて二例が認められ、物語中において特異な表現となっている(もつとも、この表現を持つ物語は、決して少なくはない)。

ここでの表現を細かく見ていくと、(A)↓(B)↓(C)の推移が考えられよう。つまり、(A)「親の思ふほどは、子は」の対比表現が、「子」を落として(C)「親の思ふばかり、思たまはぬ」へと推移し、その中間に(B)「親の思ふばかり、子は思はぬ」の表現を想定し得ると思われるからである。やはり(C)に分類しておいた「徳川家本」の記述は、「教育大本」の表現のレベルを、さらに推し進めたものであろう。

一方、「親の……」表現を有さない「住吉本」「神宮文庫本」「真銅本」以下の諸本は、やはり祖本からは遠いものということが言えよう。それは、今までも述べてきたことと、ほぼ一致するところでもあろう。

以上のように見ると、(A)(B)の諸伝本、その中でも(A)の「成田本」「契沖本」は、やはり最も祖本に近い伝本のように思われる。

ただし、「契沖本」の本文には、まだ見極め難い所がある。それは、「親の……」に続く所のような記述があるからである。

黒髪を筋異にと有とも、いなぶきにあらず。(契沖本)

この表現は、次の記述と対応する。

頭の髪お(を)筋異にと有りと、いなぶき身かは、(藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本)

四本のみに見られる表現で、伝本間の強い関連が窺える。内容的には「契沖本」

の方が理解し易いのだが、表現上の難易のみでは、その前後関係は判断できない。だが、前述した(A)と(B)の区分でのことを重ね合わせると、「契沖本」が「藤井本」などに先行する可能性は生じよう。

六、中納言が姫君を訪う場面(二)

『住吉物語』の諸伝本の中で、祖本との関連を考える上で重要と目される本文は、「成田本」「契沖本」「藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本」あたりであることは、以上の伝本間の具体的な表現の比較を通して、かなり明らかになってきたのであるが、ここで検討しようとする「中納言が姫君を訪う場面」の後半は、ほとんどそれらの伝本を中心にして展開されることになる。それは(表2)を見渡すことで(J)↗(M)に至る場面の有無は知り得たことではあるが、それも単なる場面の有無ということではなく、祖本と強く結びついたものとして考えられてくる、ということである。その点について、以下に論じてみよう。

姫君が(I)での中納言の言葉に答える(J)の場面、それに対して更に中納言が応じる(K)の場面、その後の姫君と侍従の様子を描く(L)(M)の場面を、まず引用してみよう。

(J) 姫君、「母宮のことも、乳母のことも思はず。」⁽⁴⁾ 三条え渡りなば、殿を見奉

らで程経んこともやと悲しくなんと言葉の下に、泣く泣く聞え給ほどに、

(K) 中納言うち泣き給て、「三条へおはすとも、我生きたらんほどは、離れ聞ゆべきにはあらず。なかなかそのこと、な思しそ」とて、立ち給を、

(L) 「見聞えんことも今ばかりぞ」と思ひて、泣く泣く顔をふり上げて見やり給へば、目もくれ、悲しき限りなし。

(M) 侍従も、かたはらに、よそ目もしらず、泣きあたり。(成田本)

以上の「成田本」の本文に対して、「契沖本」と「藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本」では、傍線(イ)↗(ル)の部分が、次のような表現になっている。(成田本)と同じ、あるいは近い表現には、○印を、その冒頭に付した。)

〔契沖本〕

- (イ) ナシ
 (ロ) 言葉も聞えぬほど、
 (ハ) の給へば、
 (ニ) ○我生てあらん程は、
 (ホ) なにか其こと思す、
 (ヘ) 今ひと目とて、御
 (ト) ○見やり給ふに、
 (チ) 心も消る程にぞ有ける。
 (リ) ○「成田本」に同じ。
 (ヌ) ナシ
 (ル) ○「成田本」に同じ。

〔藤井本〕以下の三本

- (イ) ナシ
 (ロ) 言葉も聞えぬほどに、
 (ハ) ○聞え給へば、
 (ニ) まろが生きたらむ程は、
 (ホ) なにかはその事を思す
 (ヘ) 今一度と、
 (ト) 見給ふに、
 (チ) 「契沖本」に同じ。
 (リ) 侍従と共にぞ、
 (ヌ) ナシ
 (ル) 泣きゐ給へる。

(イ) (ハ) を整理してみると、「契沖本」と「藤井本」とが共通しているのは(イ)(ロ)(チ)の部分で、この両本の関連の深さを物語っている。一方、「成田本」との関連を見ると、「契沖本」が(ニ)(ト)(ヌ)の四か所に対して、「藤井本」は、わずかに(イ)一か所のみである。三伝本のこの関連から推測できることは、「成田本」→「契沖本」→「藤井本」の系譜か、あるいは「契沖本」→「成田本」、「契沖本」→「藤井本」の系譜の可能性のいずれかであろう。勿論、その他にも測り知れない様々な状況があったのかもしれないが、主な伝本間の関係を見ていく限り、そのようになると思うのである。

右の(イ)(ロ)(ハ)の場面を持つ伝本には、他に「住吉本」「書陵部本」「徳川家本」があるが、その三本とも、(ロ)での中納言の言葉に「三条へ(姫君が)おはすとも」と答えているのに、(イ)の姫君の会話中にそれに対応すべき「三条」の言葉がない。そのために、(ロ)での中納言の言葉が唐突に感じられるのである。それでもまだ「住吉本」には、「成田本」などの諸本と類似した表現が(イ)にはあるのだが、「徳川家本」「書陵部本」にはそれがなく、徐々に変化を見せている。

(J)『久しく見奉らぬこともや』と思ひ侍に」など、まぎらかし給ふを、(徳川家本)

(J)姫君、いよいよあはれまさりて見え給ふ。(書陵部本)
 「書陵部本」の右の表現は、改作の進んだ段階での表現と見て異論なからう。また、「徳川家本」の本文は、前半は「成田本」などにも認められた表現だが、後半の「まぎらかし」は、まさに改作者の意図的な解釈を反映した表現だと見做し得る。いわば、「成田本」などの諸本と「書陵部本」との中間的存在にあることが、この部分からは判断できよう。

以上、(表1)に示した(2)の場面を、(G) (ハ)の主な要素について、具体的に本文に即しながら検討してきたのだが、その結果として、「成田本」「契沖本」「藤井本」などの伝本が、最も「原住吉物語」の本文を想定する上に重要な位置にあることを、改めて確認し得たと思う。しかし、場面が変わると伝本の本文も相当に変化しているので、もう少し、追いつけてみることにする。

七、尼君からの迎えの車が来る場面以降

(表1)を再度ご覧いただきたい。そこで明らかのように、(4)「10月20日余り、姫君、家を出る」から七場面を経て(2)「少将の悲嘆」に至るまでのところは、今取り上げた一七本の諸伝本のうち、「東京教育大本」以下の半数を超える諸本において、場面が前後したり、削除されたりなど、極めて激しい変化が連続している。その全てに亘って述べていく余裕はなく、また、限られは諸本の比較に留らざるを得ないのだが、一方で激変の場面が連続しているがら、他方において、「成田本」から「契沖本」に至る七本が、同じ順序の場面を持つことは、改めて注目を要する。

以下に、その主な点については述べてみたいが、変化に移る直前にあって、いずれの諸伝本にもある(3)「尼君からの迎えの車」の場面について、まず見ておかねばならない。

さて、夜ふくるほどに、車やりにきたりければ、^⑪櫛の箱、また琴など、車に

入れて、侍従ともに乗りぬ。(成田本)

右の「成田本」の本文で見る限り、この(3)の場面は、ほぼ(A)(B)(C)の三つの要素に分けることができるので、各々の要素ごとに、諸本との比較をしてみたい。ただし、「教育大本」以下の諸本は、その本文の性格もほぼ測定し得ているし、今後の変化も激しいので、必要に応じて取り上げるとして、本文は示さず、ここでは「契沖本」までの七本に絞って見ていくことにする。

まず、(A)の表現についてである。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| ○ さて、夜ふくるほどに、 | 車やりてきたりければ(成田本) |
| ○ さ。夜ふくるほどに、 | 車の音の出できたれば、(古活字十行本) |
| ○ さよふくるほどに、 | ・「羽根満主賀本」 |
| ○ さよふけがたに、 | 車の出できたれば、(藤井本) |
| ○ さても、夜もやうやうふくるほどに、 | 車参りたれば、(契沖本) |
| ○ その暮ほどに、 | 御車出でぬれば、(書陵部本) |
| | 尼君の方より御車まいらせられければ、 |
| | (住吉本) |

場面の变化を告げる接続詞「さて」であるが、「成田本」の他は「書陵部本」に「さて」とあるのみで、他の諸本にも「横山本」の「さて」、日も暮れになりゆくまに」の一例しか認められない。「さて」のある本文は、その統きが「夜ふくる」となっており、「さ。夜ふくる」とはどの諸本にも記されていないことから、あるいは、「さて、夜ふくる」が「さ。夜ふくる」と変化した可能性がないとは言えない。とは言え、「さて」の語が「原住吉物語」に存在していたどうかは不明である。

「(さ)夜ふくるほどに」は、右に記した中で「住吉本」のみは「その暮ほどに」とあって、尼君からの迎えの車が来た時刻に違いがあり、「横山本」「白峰寺本」も類似した本文をもっている。だが、右に引用した諸本は「(さ)夜ふくるほど

に」ではほぼ一致しており、同様の表現は「徳川家本」にもある。その他にも極めて本文の短い「京都本・国会本」(「夜ふくるまに」)や、逆に長大な本文をもつ「真銅本・野坂本」(「さ夜ふけて」)、意欲的な改作を施している「神宮文庫本・陽明文庫本」(「夜いたくふけて」)にも記述があるので、尼君から車が来たのは深夜であることは動かないだろう。勿論、尼君は乗車していない。

次に車の来る部分であるが、「藤井本」は「古活字十行本」にある「車の音の出できたれば」の「音の」を脱落したものであろう。そう見れば、「藤井本」以下三本は、ここでも全く同じ表記である。それにしても「車の音の出できたれば」の表現は、特異である。姫君側では、夜にひ。つ。そり。と車を寄こしてもらいたいと、君に依頼していたからである。姫君失踪後に、そういえば車の音がしたと、女房の兵衛が思い起こす場面が「神宮文庫本・陽明文庫本」にはあるので、それは、この部分と呼応しているのである(注6)。だが、それは本来『住吉』にあった表現ではなく、「車の音の」の部分からの連想であらう。

いずれにしても、この部分の表現は様々で、「(車が)まゐる」(契沖本・住吉本・神宮文庫本・陽明文庫本)と、「(車が)出で来る」(藤井本・書陵部本・国会本・京都本)とが、伝本も多く、表現としても妥当なところであらう。「成田本」の記述も、「遣りて」が他の本文には全く見られない表現だが、「きたりければ」と続いているので、それらの表現とはほぼ同じ類のものと考えてよからう。ただし、「徳川家本」(「御車うつりぬ」)は、やや異質な記述となっている。

また、尼君の所から来た車に対して、「御車」と尊敬表現がなされているのは、「書陵部本」「住吉本」「横山本」「徳川家本」「真銅本」「野坂本」「神宮文庫本」「陽明文庫本」などであるが、これらの諸伝本は、「野坂本」や「神宮文庫本」に象徴されるように、思い切った改作がなされている本文であり、元来の表現であったかどうか疑わしい。ただ「車」と記されている「成田本」「藤井本」「契沖本」などとは、やはり一線が画されているように思える。

次に後半の(B)(C)の部分についてみてみよう。

○櫛の箱、また琴など、車に入れて、
○櫛の箱と御琴ばかりぞ持ち給へる。

○櫛の箱と、しやうの琴とばかりを取
り、

○姫君の御髪箱、しやうの琴ばかりを
ぞ、そへられける。

侍従、ともに乗りぬ。(成田本)

御車のしりには、侍従、乗りたり。(藤

井本・古活字十行本・羽根満主賀本・契

沖本)

御車に、侍従、乗り給ふ。さすがに、住

み慣れし都を思ひ離るる御心、あはれな

り。(書陵部本)

侍従殿も、御車のしりに乗りけり。涙と

共に出でさせ給ふ御心のうち、何にたと

へんかたもなし。(住吉本)

右の七本の本文を見てすぐに判ることは、「書陵部本」「住吉本」には、下段の(C)の部分に都を去る心境が付記されていることである。両伝本とも、姫君の心情なのか、侍従のそれか、おそらく両方の心中なのだろうが、やや解りにくいところがある。だが、その要素は、やがて、この(3)全体の場面で、一切の記述を省き、侍従の悲しみを詠んだ歌のみを記す「教育大本」を生むことになる。それを見ると、この(C)の場面では、侍従の心境を中心に語られていたということになる。少なくとも「教育大本」は、その解釈のもとに改作を施したということである。そこまで極端でなくとも、「真銅本・野坂本」や「白峰寺本」なども、やはり「教育大本」と同様に、櫛の箱や琴の記述はなく、この離京の心中を強調すること、ここでの(B)(上段)(C)(下段)の場面は構成されている。

そのような改作の方向を認める時、右に引用した「書陵部本」「住吉本」の本文の質も、自ずと判明してくると思う。そして、それら改作の手が相当に加わった本文の中に、「しやうの琴」の語があることも、注目してよいであろう。他にこの語がある伝本は「徳川家本」のみで、次のような表現である。

櫛の箱、しやうの琴ばかり取りぐし給ふ。侍従ぞ御車に奉る。

必ずしも、用例が多ければ、その本文が祖本に近いということではない。ま

た、改作の手がいくら入ったからといって、その本文が「原住吉物語」の本文を有していないということでもないのだが、あくまでも諸伝本間の比較を通してみる限り、「しやうの琴」の語は、もともと存在した語句だとは思えないということになる。

姫君が離京する際に持っていたものは、「櫛の箱」と「琴」ということで、諸本はほぼ一致している。勿論、先にも記したように、「教育大本」「真銅本・野坂本」「白峰寺本」にはその表現は全くなく、「国会本・京都本」には、「櫛の箱どもばかり取りぐして」とあって、「琴」の記述はない。ただ、『住吉物語』の内容からして、琴の要素は、物語前半と後半とに各々重要な働きを担うものとして記されているので、琴を有さない「国会本・京都本」が祖本を忠実に伝えているものとは考えられない。

琴の消去も改作の方向なら、そこに「夜の御衣」や「上童の乙若」を付加したり(「真銅本・野坂本」、車を待つ間に、侍従が身の回りを片付ける様子を描くこととで(「真銅本・野坂本」「白峰寺本」、一層具体的に、内容を豊かにしようとするもの、やはり改作の方向である。つまり、本文の長大化と縮小化との両方が、必要に応じて自由に行われていたということである。

残された問題点として、「車に入れて」「成田本」、「御車のしり」に(「藤井本」以下三本と、「住吉本」「神宮文庫本・陽明文庫本」、「御車に奉る」(「徳川家本」などの表現である。

「車に入れて」は「御車に奉る」と同趣の表現で、後者は敬意が加わったものだが、他の伝本にこの種の表現はなく、全体的には異質である。「成田本」は、(A)の「車やりて来たれば」の記述とともに、この(3)の姫君離京の場面は、やや特異な表現を有した本文だということが言える。そのために、「成田本」の本文の質を充分に見定めることができない。勿論、いままでに述べてきた内容から「成田本」が他の諸本よりも多くの改作の手が入った後に成立したものと考える。

「徳川家本」の「御車に奉る」は、「横山本」に「御髪の箱、御琴など奉り」とあるのが参考になる。ただし、「横山本」は、「住吉本」や「神宮文庫本」などと

同じく、「御^お髪^{かみ}の箱」の語を有しており、それらの諸本の本文の質からして、同じ「奉る」の表現をもつ「徳川家本」の本文は、今までにも述べてきたように、祖本に近い形のものとは思ひ難い。

以上、姫君が家出をする場面の前半において、いずれの諸伝本にも描かれている最後の場面である、(3)「尼君からの迎えの車」の部分について、できる限り丁寧に諸本を比較し、それらの本文間の落差から、より祖本に近い形を求めようとしてきた。そして、この部分に関しては、祖本に最も近いと目される「成田本」の質を、より補強する積極的な例証はあがらなかったが、他の多くの諸本と異質な「成田本」の性格は浮上してきたようだ。それも、改作の手が相当に入ったと思われる諸本とは異なったものとしての特長である。その点について、以下、更に場面を重ね合わせてみよう。

八、姫君の家出と人々の悲嘆

ここでは、(表1)の(4)～(3)あたりまでについて論じてみたいのだが、場面の数も多く、諸本により激しい異同があるために、場面ごとの詳細な比較は避けて、重要と要われる幾つかの点に絞って見ていくこととする。それを通して、諸本間の関係を、より明確なものとしておきたい。

まず、(表1)で示した(4)「一〇月二〇日余り、姫君、家を出る」の場面である。ここでまず問題となるのは、姫君が家を出た月日である。この部分に関しては以前に論じたことがあるので(注7)、詳しくは触れないが、今は諸本の比較という観点から、若干のことについて述べておきたい。

この(4)の場面でも、やはり基準となる本文は「成田本」と思われるが、「契沖本」までの七本を中心に、以下、比較検討に入りたい。まず、「成田本」によって、この場面の本文を掲げてみる。

(4) 神無月廿日余りのことなれば、有明の月影、おりふし物あはれなるに、^(イ)出でて行けん心のうち、いかばかりかは悲しかりけむ。^(ロ)風激しき空に、数足らぬ音を鳴き渡る雁が音も、折知り顔に聞こえけり。^(ハ)雲にかかる月も、常よりも

おぼろに見ゆるも、我が身のくまなき心にうちそへて、いよいよ悲しさ限りなし。(三六頁)

右の引用文で、他の諸伝本と比較してすぐ目に付くのは、(イ)の月日の箇所である。「成田本」を初めとする多くの諸本は「神無月廿日余り」であるが、「藤井本・古活字十行本・羽根満主質本」「契沖本」の四本のみが、

頃は長月の廿日余りの事なれば、

とあって、一か月、繰り上がった期日に、姫君の離京の日が設定されている。勿論この期日は、物語のプロットの進行からして適当でないことは以前にも述べた通りだが(注8)、いずれにしても、この四本の本文に同様の表現があるということは、それら相互の本文の近密の度合いを物語るものである。既に、「契沖本」と「藤井本」などとの本文の関連の深さは繰り返し指摘してきたことはあるが、ここで再度、その点を強調しておきたい。

また、神無月ではあるが、

比は神無月末なるに、

とする「横山本」も存在する。言うまでもなく、この表現は「横山本」の意図的な改作の所産である。「横山本」の特異な本文の記述については今までも述べてきたことであるが、その点について、ここでもまた同様の方向が示されていると言ってよい。

この(イ)の部分の記述を持っていない「白峰寺本」や、(4)の場面そのものが存在していない「東京教育大本」の本文は論外として、改作の程度の著しい「真銅本・野坂本」や「神宮文庫本・陽明文庫本」にさえ、「神無月廿日余り」の記述があることを思えば、それがやはり祖本にもあった表現として認めてよいのではなかと思う。

次に(ロ)の表現であるが、七本に絞って比較してみると、次のようになる。

○有明の月影、おりふし物あはれなるに、(「成田本」)
○有明の月影、いとあはれなるに、(「契沖本」)

- 有明の月影も、あはれるに、〔藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本〕
 ○有明の月、あはれるに、〔書陵部本〕
 ○ナシ 〔住吉本〕

右の引用文から「契沖本」と「藤井本」以下三本との近似性、「成田本」が他の諸本とやや違った表現を持つこと、などが知られよう。それにしても、「住吉本」は別にして、右の六本は、(d)ではほぼ同趣の表現パターンを有しているということが言えよう。

因に、右の諸本と同様の表現を有する本文に「徳川家本」〔有明の月影も物あはれるに〕、「神宮文庫本・陽明文庫本」〔有明の月さし上りて、もの哀なるに〕、類似表現の諸本に「国会本・京都本」〔降りみ降らずみ、定めなき有明の月もあはれるも〕、「真銅本・野坂本」〔有明の月、いと心細く、折しり顔にをぼえて、いとど哀をぞ催しける〕などがある。「国会本」「真銅本」という両極端の本文にもある表現であることから、「成田本」「契沖本」あたりの表現の妥当性は窺われよう。

なお、「教育大本」には、(4)全体の場面がなく、「白峰寺本」「横山本」には、ここの(d)の表現がない点で、「住吉本」に近い。

(d)に続き、姫君・侍従の心情描写へと移る(e)は次のようになっている。

- 出でて行きけん心のうち、いかばかりか。は悲しかりけむ。〔成田本〕
 ○出で行き給けむ心のうち、いかばかり悲しかりけん。〔藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本〕
 ○ナシ 〔書陵部本〕「住吉本」

(e)と同様の表現を有する本文は、右の五本のみである。それだけでも、五本の近接した相互関係は充分である。その細部については、(e)の表現全体としては「成

田本」と「藤井本」以下の三本が近く、敬語表現に注目すれば、「藤井本」以下三本と「契沖本」との関連が思われる。その結果、「成田本」から「藤井本」へ、そして「契沖本」へといった経緯も考えられよう。

「書陵部本」「住吉本」には(e)の部分がなく、「徳川家本」「国会本・京都本」「横山本」「白峰寺本」などにも無い。それらは、(4)の場面が全体として省略化傾向にあり、「白峰寺本」のように本文全体としてはかなりの量を持っているが、(4)の場面は極端に簡略化した表現をとっているものもある。

その逆に、「神宮文庫本・陽明文庫本」は、父中納言や中君・三君との別れを、姫君の心理に即して詳述し、「真銅本・野坂本」などは、姫君と侍従とに歌を詠ませて見せ場の一つとしている。つまりは、登場人物の心中思惟の部分をいかに添削するかによって、それぞれの諸本の本文が成立してくるということである。(e)についてみてみよう。

- 風激しき空に、数足らぬ音を鳴き渡る雁が音も、折知り顔に聞こえけり。〔成田本〕
 ○風激しき天に、数足らぬ雁が音も、折知り顔に、〔契沖本〕
 ○風激しき空に、数絶えぬ音を鳴き渡る雁も、折知り顔に聞ゆ。〔藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本〕
 ○風激しくて、鳴き渡る雁が音も、折知り顔に聞こえ、〔住吉本〕
 ○風激しく、鳴き渡る雁のこゑ、折知り顔に、我を訪ふかと物悲しさに、〔書陵部本〕

右に引用した部分で注目すべきは、「数足らぬ」か「数絶えぬ」かの記述である。もとより、書写に際して「え」と「ら」は、しばしば誤写される文字であるが、風と雁が音の素材は、後述するように相当数の伝本に認められるものの、「数……」の表現は右の五本のみに限られているので注意を要する。文脈からすれば、「数絶えぬ音を鳴き渡る雁」とある「藤井本」以下の三本が妥当な表現である。「数

足らぬ音」では、意味が充分通らない(注9)。にも関わらずその表現を持っているというところに、「成田本」「契沖本」の近さが窺える。ただし、「成田本」の表現が「契沖本」に先行している。また、全体の文脈からして、「成田本」と「藤井本」も、極めて近い関係にある。

このやや特異な「数……」の表現を欠いたものが「住吉本」であり、それは「白峰寺本」「横山本」「神宮文庫本・陽明文庫本」などにも認められる記述である。つまり、文脈の意趣を汲んだ表現ということである。「徳川家本」の、

雁が音の折知り顔に鳴き渡るこゑも、身にしむ心地す。
も、その同一レベルにある。

ただし、「白峰寺本」や「横山本」は、この(二)の部分に「成田本」で分類した(注)の部分を入り込めてあげていつているのである。

また、「書陵部本」にある傍線部分の記述は、(二)の部分では特異であるが、それを受け継いでいるのが「国会本・京都本」である。次の(注)の部分で「藤井本」「契沖本」や「神宮文庫本・陽明文庫本」に類似表現があるものの、この(二)の部分を見る限り、「国会本・京都本」の改作は、「書陵部本」の本文を基本としてなされた、と考えてよいであろう。

(注)の部分に移ろう。

○雲にかかる月も、常よりもおぼろに見ゆるも、我が身のくまなき心にうちそへて、いよいよ悲しさ限りなし。(成田本)

○雲間をぞ行なる月影の、常よりもおぼろに見ゆるも、我をとぶらふ心地ぞしける。(契沖本)

○雲間を出る月の、つねよりも、我をとぶらふ心地ぞしける。(藤井本・古活字十行本・羽根満主賀本)

○雲間の月も、常よりおぼろに見えけるも、我身のあはれをとぶらふかと、尽させぬ涙ぞ先立ちける。(住吉本)

○常よりもおぼろに見ゆる月の光は、我が涙かきくらすにやと、ひとやりなら

ず悲し。(徳川家本)

○常よりもおぼろに見ゆる月影も、我をとぶらふ心地して、中納言のたぐひなく思しつるをそむきまいらせて、いづくとて行らん、いかに嘆き給ふらんと、思ひやるも悲しくて、(神宮文庫本・陽明文庫本)

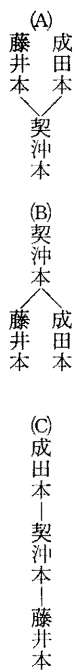
(4)の最後の場面で、類似した表現をもって終えている伝本は、管見の限りでは、右に掲げただけである。

「神宮文庫本・陽明文庫本」は、引用文の後半に見られるように、改作の手が相当に加わっているのだが、それでも、右に引用した諸本に共通した重要語句は全て取り込んでいる。その意味では、「原住吉物語」を究明する上で、今後とも注意して読まねばならない本文だと思う。

「徳川家本」は、「神宮文庫本」と同様の語順を持ち、他の諸本と比較して、やはり意図的な改作の跡は明瞭である。それも比較的「成田本」などの祖本に近い本文に即しつつなされたようにも思う。

問題は、「成田本」「契沖本」「藤井本」三本の関連ということになる。やはり、ここでも「契沖本」の本文がキーポイントを握っているようである。つまり、「成田本」と「藤井本」との表現は、必ずしも近い形のものではない。だが、その間に「契沖本」を置いてみると、その三本間の相互関係が浮かび上がってくるということがある。同時に、「住吉本」や「神宮文庫本」などの本文は、「契沖本」から流れ出たものではないか、と推測できることである。それだけ、「原住吉物語」の本文を模索する上で、「契沖本」の存在には重要な意味がある。同様のことは、先に述べてきたことでもあった。おそらく、「住吉本」以下の少なからぬ諸伝本の書写・改作に際しては、「契沖本」が大きな役割を担っていたであろうことは認めてよいであろう。

そこで、「成田本」「藤井本」「契沖本」の関係についてであるが、可能性としては、



の各々が成り立つと思う。(B)の部分に限っては(B)(C)が適当かとも思うが、やはり全体的には(B)(C)の系譜は考えにくいように思う。勿論、それを断言できる内部

徴証は少ないのだが、今までの比較検討を通じて言えることは、「契沖本」には「藤井本」と極めて近い表現が多いということである。例えば、この(4)の場面での、姫君離京の期日がそうであった。あるいはまた、以後の場面においても、例えば(表1)の(7)「夜、少将、姫君を訪れる」の場面でも、少将が案内を乞う女房が、「藤井本」や「契沖本」は「兵衛のすけ」であるのに、「成田本」は「兵衛」といふ若き女とあるからである。「藤井本」と「契沖本」の類似は明確である。

ところが、「契沖本」は、その部分でも、「兵衛のすけ」のみに留らず、「兵衛のすけ」といふ若き女房」と記すのである。その点では「成田本」に近似している。いわば、「契沖本」は、多くは(あるいは基本的には)「藤井本」に依りつつも、「成田本」の本文をも取り込んでいる、と見做した方がよいということである。

それを別角度から見ると、(表1)の(8)「中君・三君の所にも姫君おらず」の場面で、姫君の失踪を知って人々が騒ぎ、中君・三君の所に居るのではないかと思案する所で、「成田本」「藤井本」などのほとんどの諸本が、中君・三君の両者を記しているのに、「契沖本」は「中の君の御方におはすにや」と、中君のみに焦点を絞り、変化を与えていることである(注10)。同じく、(表1)の(10)「中君・三君の思い」の場面で、失踪した姫君を中君・三君が偲ぶところでも、「契沖本」は「国会本・京都本」とともに、「中君」のみの心中思惟とするなど、物語では比較的影の薄い中君を、意図的に登場させることでバランスをとろうとしているかのごとき改作姿勢が窺われるからである(注11)。

以上のことを考え合わせるならば、前記した(B)(C)の系図にはやはり無理が生じるであろう。それでは(A)がよいのか、ということになるが、おそらくそれに近い形ものが考えられると思う(注12)。勿論、「成田本」にしても「藤井本」にしても、大きな視点に立てば、むしろ極めて類似した本文であるということも確かである。そのために、「成田本」「藤井本」あたりをおさえておけば『住吉物語』の読みに支障はないではないか、との見方も生じよう。だが、両本文の中に一歩足

を踏み入れると、その差は決して少なくないことは、今までの比較を通して明らかである。

そこで言えることは、「成田本」「藤井本」の上に、共通する親本の存在を考えてみることである。それは必ずしも『住吉物語』全体にとっての祖本ということにはならないかもしれないが、その可能性を十分に含みつつ、「成田本」「藤井本」の成立に直接的に関与した、より近い所にある親本の存在ということである。今回の論では、とりあえず、そこまでのところは確認しておきたい。さらに私としては、「成田本」の方に、より祖本に近い表現を感じてはいるのだが、以上に見て来た場面を通しては、「成田本」の表現にやや孤立した所が多く、そこまで断言するのは独断に陥る可能性があると思うからである。

九、「徳川家本」の位置

この論においては、諸本の比較検討を通して、私なりに「原住吉物語」の本文の姿を、少しでも明らかにしたいとの目的で論じてきたのであるが、一方において、「徳川家本」の本文の質も見定めたいという思いもあったので、そのことについて既にできるだけ言及してきたつもりである。

それは、最初にも述べたように、磯部貞子氏に、「徳川家本」に寄せる熱の込もった御論があることと、氏のお考えに否定的な桑原博史氏の御論もあるからである。

直接的に両氏が問題として取り上げられた場面は、(表1)で示した(8)・(13)の場面である。その所で「徳川家本」の文脈が、主語が不明であったり、文脈が不確かであったりすることに問題はあられるわけである。

ところが、この数場面は、(表1)で明らかのように、「教育大本」「徳川家本」以下の諸伝本に激しい異同が見られる部分であった。「徳川家本」の場面は、その間の(7)「夜、少将、姫君を訪う」、(9)「中納言の悲嘆」、(11)「継母の偽悲」、(12)「少将の悲嘆」といった、姫君の失踪を悲しむ周囲の人々の心情を中心とした場面を消去し、中君・三君の行為や思惟に焦点を絞って、(8)「中君・三君の所にも

姫君おらず」(10)「中君・三君の思い」(13)「三君、姫君の歌を発見」という場面を、意図的に接続させるといふ改作姿勢の結果に生じたものであった。同様に場面の省略の激しい「国会本・京都本」「横山本」と比較しても、「徳川家本」の意図は明瞭なのである。

既に述べてきたように、「徳川家本」の本文自体は、「成田本」「藤井本」と近い所も多くあったのだが、まとめあげて述べようとする意識は充分に窺われたわけである。(13)の場面で、「徳川家本」には、三君が発見した姫君の手紙に、姫君の歌が二首も記されていることなど、決して「成田本」「藤井本」を越えて祖本により近い本文を有しているとは思えない。いずれにしても、これらの場面での「徳川家本」の本文の錯綜は、多少細かく見ていくとすぐわかるように、本文自体の問題とする所は少なく、改作の姿勢により多くの原因があったということである。

一〇、まとめ

従来の研究において、『住吉物語』の祖本は、ほぼ一つであったろうと言われてきている。私もそのように思う。だとしたら、もともときわめて類似している「成田本」「藤井本」「梨沖本」の本文を比較してみても、結果的にはそれほど成果は得られないはずだ、という予測がつかないわけではない、そのように考えるのも当然のことだろう。

しかし、ここに検討してきたように、長大な本文の量を誇る「真銅本・野坂本」や「神宮文庫本・陽明文庫本」などにも、また逆に、分量の極端に少ない「国会本・京都本」「徳川家本」などにも、それぞれ改作の意図と程度には差はあるものの、共通する重要な本文はおさえられている、ということを示すことができる。改作とは言え、むやみな姿勢はとっていないということでもある。そして何よりも、それらの諸本の中心的存在は「成田本」「藤井本」であることを改めて明確にしておくことに意味がある。私としては、「成田本」の性質をもっと考えねばならないと思っている。こうした裏付け作業を積み重ねてい

くことが、たとえ遅々とした足どりではあっても、今後の『住吉』研究には、必要な方向であると思っているからである。

注

- (1) 磯部貞子氏「徳川家本と諸伝本との相違」『尾州住吉物語とその研究』所収。笠間叢書49、一九七五年二月。
- (2) 桑原博史氏「住吉物語の成立」「現存諸本の成立と展開過程」『中世物語研究——住吉物語論考』所収。二玄社、一九六七年十一月。
- (3) 諸伝本の引用は、「成田本」「藤井本」「横山本」「京都本」「古活字十行本」は横山重校訂『住吉物語集(本文篇)』(鎌倉時代物語集二)所収、(大岡山書店、一九四三年一月)、「白峰寺本」「神宮文庫本」「野坂本」は友久武文編『伝本住吉物語集』(中世文芸叢書11)所収(広島中世文芸研究会、一九六七年二月)、「羽根満主賀本」は築瀬一雄編『再訂住吉物語』(碧沖洞叢書第五十輯)所収(一九六四年六月)、「徳川家本」は磯部貞子著(注1)同書所収、「陽明文庫本」は高橋貞一編『住吉物語』(文芸文庫・日本古典文学11)所収(勉誠社、一九八四年三月)、「国会本」「住吉本」「東京教育大木」「梨沖本」「書院部本」「真銅本」は桑原博史著(注2)同書所収による。ただし、本文の引用に際しては、必要に応じて、適宜、漢文を出て、句読点・濁点などを付した所がある。
- (4) 桑原博史氏「第一類諸本の成立と展開過程」(注2)同書所収。二四頁。
- (5) 豊島秀範『住吉物語』試論——年立上の期日と改作姿勢——『弘前学院大学紀要』20号。一九八四年三月。
- (6) 「神宮文庫本・陽明文庫本」には、104「中納言の悲嘆」の場面、中納言の詰問に対して、女房の兵衛が、「昨夜、この対の前に車の立ち候ひし。人々まゐる車かと思ひて候ひしに、このなりける。あさましや」と答えている。この両本文には、(3)「尼君からの迎えの車」の場面では「車の音」の記述はないので、104の場面では「車の音」を持ち出しているのは、「古活字十行本」などの本文を見ているという可能性が強いということである。
- (7) 豊島秀範(注5)同論文、および『住吉物語』の改作姿勢——物語内引用としての試論——『弘学大語文』第10号(弘前学院大学国語国文学会)一九八四年三月。
- (8) (注5)(注7)同論文。
- (9) ただし、「風」との関連で「雁が音」を考えた場合、「数足らぬ音」にも情況に適合した文学的描写が配慮されていると言えなくもない。おそらく和歌との関連が問題となるのであろうが、その点は、いずれ細かく調査することとする。
- (10) 「梨沖本」のみが(8)の場面で「中君」をあえて登場させているのと対照的に、「住吉

本」(「三」の君の御方へやと)、「神宮文庫本・陽明文庫本」(「三」の君の御方におはしたるかとして)は、「三君」を中心として描いている。(8)の場面が全く欠落している。「横山本」「国会本・京都本」及び、(8)の場面はあるが「中君・三君」の呼称を全く記さない。「徳川家本」を含めて、「契沖本」以下のこれらの諸本は、やはり改作者の解釈と作為とが相当に加えられた本文であると見做すべきである。

(11) (8)の場面は、「契沖本」では「中」の君、あやしく、此ほど世を憂しとの給ひしか、かかることの起きつるよ、とておのおの悲しみ合へり」と、中君を登場させているが、「おのおの」とあるように、三君の存在も重複する表現となっている。それだけに、中君・三君の両者の呼称が記されていた本文に基づいた改作の経緯が窺われよう。それに対して、「国会本・京都本」は、同じく中君に焦点を絞った記述だが、「おのおの……」などの描写はなく、中君のみに重点を置いた、乱れのない叙述となっている。そこに、「契沖本」↓「国会本・京都本」という経緯が想定される。また、「徳川家本」「白峰寺本」は、中君・三君のいずれの呼称も記されておらず、誰が言っているのが不明な形での記述である。「横山本」「真銅本・野坂本」には、この(8)の場面そのものがない。一方、(8)の場面で三君を登場させていた「住吉本」「神宮文庫本・陽明文庫本」は、この(8)の場面では、「成田本」「藤井本」などと同様に、中君・三君の両者を登場させている。それでも「神宮文庫本・陽明文庫本」の二本のみは、その順序が「三」の君、中の君もおはして」と、あくまでも「三君」に力点を置いた改作姿勢が保たれている点が目される。

(12) 豊島秀範「住吉物語」「契沖本」の系譜上の位置」(『弘学大語文』第11号(弘前学院大学国語国文学会)一九八五年三月)において、「契沖本」の系譜上の位置について論じておいたので、参照していただきたい。